

もの、との決別

チヨ・ヘジン

(辻本武 訳)

私が働いている地下鉄駅の片隅にある忘れ物センターは、そこが世界の標準的な部分の一つだ
と思う時がある。世界というのは忘れ物センターのような部分が果てしなく繋がっていて無限大
であるが、パッチワークキルトのような集合体に過ぎないとも思えるのだ。とんでもない奥地で
もない以上、世界のどこに行ってもそこには財布と眼鏡と本があるのだ。携帯電話とデジタルカ
メラ、ノートパソコンのような電子機器も、ない所よりもある所の方が多いのと同じだ。私が旅
行を嫌がり、出来るならば生活圏内にだけ動こうとするのも、世界というは、もの、の集合に過
ぎず、どこへ行っても同じだと長年にわたって信じてきたからかも知れない。今まで行ったこと
のない都市を旅行した時のホテルの浴室兼トイレにも、普段見慣れているアルミニウム製のペ
ーパーホルダーとプラスチック製の石鹸入れがあるのだから。私が叔母にこんな考えを言った時、
叔母は面白くないという声でこう答えた。

—無精な性格というのは、実に複雑な説明をするんだねえ。

叔母が療養所生活を始めて二ヶ月ぐらいが経った頃だった。その日、叔母は療養所の休憩室と一緒に座って、夕方まで長話を交わした。大部分は徐君に関する事だったが、私には叔母が病氣して初めて知った徐君の存在より、以前と全く変わらぬにしゃべり、笑い、反応する叔母の姿の方がもっと印象的だった。どう見ても叔母は普通の患者のようには見えなかった。療養所の他の老人患者たちと同じように舌が回らず一人ではちゃんと歩けないのであるが、そういう患者たちとは違った種類の人間のような感じだった。

軽い頭痛だと思つて病院を訪ねたらアルツハイマー初期の診断を受けた叔母は、直ぐにその次の日から身の回りを整理し始めた。三〇年以上、教師として勤めてきた学校に辞職願を出し、マンションを売りに出すなどして預金と各種の年金で死ぬまで療養所の費用が賄えるよう措置した。家具や家電製品、服や本は大部分を寄贈したり処分し、大事に育ててきた二匹の猫は町の動物病院に預けた。不足のないように食べさせて、二匹のうち一匹でも病氣になつたり先に逝くことがあれば安楽死させてくれとお金を出すと、動物病院側は快く叔母の提案を受け入れた。すでに平均寿命に近い年寄り猫たちであつた。

叔母は療養所に行く前日になつて、市内の高級レストランに兄弟たちとその家族たちを呼び、その事実を明かした。大声でしゃべり騒がしい食事を終えてからデザートに出てきた果物を食べている時だった。レストランでは一瞬静寂が広がった。アルツハイマーは進行するだけで、根本的治療が不可能な退行性疾患だと叔母は淡々と説明したが、残る人生の居住地を療養所にする

いう叔母の選択は、その病名以上にみんなにショックを与えた。叔母はその時まだ六〇歳だったのだ。叔母の妹は泣き顔になり、叔母の兄である私の父は目を真つ赤にして叔母を見つめ、なぜ結婚もせずに家族が一人もいないまま療養所で最期を送るのかと声高に叱りつけてレストランを飛び出した。叔母を世話してあげようと進み出る人はいなかった。叔母の妹のすすり泣く声だけ響きみんなが沈黙する中で、叔母は口をぎゅつとつぐんだまま両手で握りしめるコップばかりを見下ろしていた。コップに投影された照明が叔母の顔を透明に映し出していた。その日の夕方、レストランには他にお客さんが入って来なかった。後になって私は叔母がそのレストランを借り切っていたことを知った。叔母はその夕食を、記憶がまだあつて意識が鮮明な時の最後の晚餐だと考え、生涯で一番の贅沢をしたのだった。

それはもう五年前のことだ。

五年の間に叔母は急速度に年を取り、病が進んだ。叔母の体を支配している病気はケチで貧乏くさい神殿からのお告げみたいなので、寛容という恵みは施さなかった。看護師に脇を支えられて休憩室に入ってきた叔母は、私がこの療養所で初めて出会った多くの老人たちと区別がつかない姿だった。全身は痩せこけ、皮膚は弛み、動きは鈍く、表情はなかった。椅子から立ち上がって、看護師が持つてきてくれた折り畳み式の手椅子と一日分の薬やおむつなどが入った布カバンを受け取ったが、いつの間にか横に近寄って来た叔母が私の肩を撫でて嬉しいという表現をした。私を直ぐには見分けられず焦点を失った目で周囲をきよるきよる見回していたこの前とは違

っていた。それを思うと、叔母は今度は薄化粧をしていることに気付いた。その時によく私は、叔母が六ヶ月前の私との約束を覚えていたことを悟った。古くなった電灯がほんの時たま電気が点くように、記憶の箱の置かれていた棚が音を軋ませて壊れていく叔母の廃墟の頭の中で、私と約束した言葉が奇跡的に残っていたのだった。

*

私は六か月前に叔母に、次は外出許可をもらって清溪川を回ってから徐君に会いに行こうと言った。ひとときわ憂鬱に見える顔が気になって、うっかり出した言葉だったが、叔母は瞬間的に明るく笑って大きくうなずいた。叔母が久しぶりに見せる笑い声だったから、私は自分が言い出した言葉を捨てて子のように捨てておくわけにはいかなかった。

清溪川は叔母が中学時代から大学を卒業する時まで、家族と一緒に暮らした所だ。その当時の清溪川は、汚い河川と掘立小屋、古本屋や古物商、たくさんの零細工場や看板もないみすぼらしい商店などでいっぱいだった。私の祖父、だから叔母の父親が故郷の土地を売って上京し、清溪川近くの平和市場の路地でレコード店を開いたのは一九六〇年代中ごろだった。正規のレコードは陳列台にあるだけで、店の中には米軍部隊から横流しされたレコードを不法に複製した、一名「ペック盤」が山積みされていたが、それでも外装だけは珍しく正規のものだったという。祖母

は色々な商売のうちで暮らして何の関連もないようなレコードを商売しようという祖父を理解できず、何ヶ月間か病に臥せた。汗を流すことを病的に嫌っていたはずの祖父が信じられなかったのである。しかしそのレコード店―長女の名前をとったテヨン音盤社は祖母の憂慮とは違っており、五人家族の生計を豊かにしてくれた。レコードが音楽を聞く唯一の手段だった頃で、蓄音器が富の象徴とされていた時代だった。私が生まれる直前まで、だから祖父が清溪川八番地のアパートに引っ越した最初の日、酒に酔って欄干から足を踏み外して死亡する時まで、テヨン音盤社はソウルの富裕有閑人たちを引き付けた有名店だった。

叔母が徐君と出会ったところもテヨン音盤社だった。

「徐君」、叔母は彼をそのように呼んだ。自分より六歳も年上の人に「君」という敬称を使うのは、愛情の表現だった。「徐君」は「誰々さん」や「先輩」のような敬称よりは確かに切ないところがあった。だからといって叔母が周囲の人たちに、徐君に関連する話を平気で言いふらすことはなかった。私の父や叔母の妹も、徐君を全く知らない様子だった。私が彼を知るようになったのは、十余年前に国内で出版された彼のエッセイを通してであった。

徐君が韓国に來たのは一九七一年であった。その時、徐君は疲れ果てていた。在日朝鮮人の彼にとつて国籍は、やられるだけで抵抗できない暴力であり、治癒が不可能な傷だった。そんな暴力も傷もない故国に漠然と憧れてきた徐君は、日本の大学を卒業すると直ぐにソウルのK大学で修士課程に進むために留学してきた。しかし故国ではまた違う苦痛が彼を待っていた。学者にな

りたかった徐君はどの学生組織にも属さないまま、起きている時間の大半を講義室と図書館だけで過ごしたが、デモと休校が繰り返された故国のキャンパスでは本を読むこと自体が大きな負い目に繋がった。朝起きると、知っている学生のうちの誰が捕まったという話が聞こえてきて、教授たちは半分以上が空席の講義室を沈鬱な表情で見回した。

遅い春だった。徐君は専攻科目が休講になって当てもなく学校を歩いて出ると、自然と清溪川に足を向けるようになった。ある労働者の焼身自殺以降、清溪川はその当時の学生たちの間でいつも話題の中心になっていた空間であった。清溪川でまず最初に彼の視線をとらえたのは、橋の下汚物の上に背を見せたまま浮かんでいる若い男の死体だった。死体は生きている人間すべてに不安と恐怖を抱かせるしかない。人間の体というのは、体温がなければ臭いを放って腐っていく肉の塊に過ぎないことを悟らせてくれる物理的な哀しみの証明書、死体はそれなのだ。徐君は川辺に座り、自分の死を暗示するようなその死体を、壊れた鏡を見るようにずっと眺めた。何人かが後ずさりして橋の下を指差してひそひそ話をしていたが、悲鳴を上げるとか泣き出す人はいなかった。どれくらい時間が流れたのか。公務員と見られる二人の男が長い棒で死体を川から引き揚げ、リヤカーに載せた。その時になって初めて徐君は正気に戻り、男たちに近付いて、死体をどこに持っていくのかと尋ねた。男たちはそれを何故知ろうとするのかと身構えた態度で問い返した。徐君は財布から現金を全部取り出して彼らの手に握らせてやり、火葬でもきちんとしてやってくれとお願いした。男たちは徐君からもらったお金を後ろのポケットにくしゃくしゃにし

て突っ込み、真心なんて感じられない様子で頭を下げた後、またリヤカーを引いてどこかへ立ち去った。後日、徐君はエッセイを書いた。拷問され、投獄され、収監生活をした間にも、世界のど真ん中で投げ捨てられていたあの死体を思うと、恐怖が消えたと。いつか自分は仮面や飾りも付けずに、誰かに死体で発見されることになるのだから。それは、設計された機能に問題が生じたらゴミ箱に捨てられ、そして埋め立てられたり焼却される、もの、のようにな……。

徐君がまた清溪川の道を歩き始めたのは、道に暗闇が垂れ込める頃だった。行く所のない徐君が歩みを止めた所がテヨン音盤社の前だった。その時まで徐君は、音楽がどれほど絶対的な力を發揮できるか一度も体験したことがなかった。魂が抜けたようになってニール・セダカからサイモン&ガーファンクルに続く曲を聞いていたところ、店の中でレコードをガーゼで拭いていた制服姿の女子高生が頭を上げて徐君の方を見た。一瞬だった。五年前に叔母はこの時のことを語った。初恋の話題は冗談のように始まったが、その日の叔母は始終真剣で、ちよつと切迫しているようにさえ見えた。徐君に初めて出会った日のことから彼の原稿や関連した事件、大田刑務所の前に行つて戻つて来たことや、かなりの年月が経つてからウソのようにかかつてきた一本の電話のことまで、叔母はちよつど壊れていく記憶を安全な試験管に入れて保管したいと言わんばかりに、徐君と一緒にいた時のすべての出来事を休む間もなく私にしゃべりまくった。「信じられるかな？」長い話の末に、叔母が疲れた声で尋ねた。「こんなに年を取つて病気になるかといつても、朝に目を開ければ私のいる所は相変わらずあの春の晩のテヨン音盤社なのよ。」

遅い昼食を食べ、携帯電話のグーグル地図を頼りにテヨン音盤社があつた場所を訪ねて行くと、フランチャイズのコーヒーショップであつた。屋外テラスまでお客さんがいっぱい入つていた。建物の三階分を占めるコーヒーショップは、外国に旅立つための搭乗手続きを全部終えた巨大な遊覧船のようだった。ところが……叔母が車椅子から立ち上がつて私の袖を引つ張り、小さな声で尋ねた。

—ところで、ここはどこなの？お兄ちゃん。

叔母の頭の中の電灯が消えた。いきなり私の妹になつてしまった。叔母はほとんど泣き顔になつて私を見つめ、私はここがテヨン音盤社があつた所だと明らかにするのがいいのかどうか分からず、戸惑つた。それは実際になくなつていたので存在しないのであるが、記憶の中では眼前にあるその透明な空間に、風が起きた。部分と部分とで継ぎ合わさつている世界の表面を剥ぎ取りながら秋の終わりに到達した風は、乾燥していた。ある瞬間、不潔な臭いとその乾燥した風に乗つて私の方に運ばれてきた。療養所の看護師からこんなことがきつと起きると何度も警告されてきたのだが、それでも私は慌てた。直ぐにトイレに行かねばならなかつた。私は叔母をまた車椅子に乗せて地下鉄の駅に向かつて力いっぱい押した。車椅子の速度がつくと、叔母は不安だという様子でひっきりなしに周囲をきよるきよる見回したが、歩みを止めることはできなかつた。叔母は今素っ裸になつたのと同じだった。

地下鉄駅の女子トイレの前で、しかし私はこれ以上どこにも行けず、途方にくれた。女性だけ

が行き来するトイレと叔母を順繰りに見て、お母さんとも呼ばなければいけないのか悩んでいる時、叔母が私の方を振り向いて、のんびりした声で尋ねた。

—お前、ファニじゃないのか？

電灯が点いた。私はその電灯が消えやしないかと思つて、すぐにうなずいた。

—あらまあ、こんなことが……。

すぐに状況を把握したのか、叔母がそう言つて顔を赤らめた。慎重に車椅子から立ち上がった叔母は私の手にあつた布カバンをひつたくるように持ったかと思つと、すぐにトイレの方によたよた歩いて行つた。私は叔母の後ろ姿を見ながら、ポケットの中のタバコの箱を指の先でいじり回した。ずっと徐君の話をし続けた五年前の叔母に、是非尋ねてみたいことがあつた。未来のジョン（叔母）は徐君に会うことを許すだろうかということ、そして排泄物の臭いがしみた病気の自分を徐君の前に連れて行く甥を絶対許さないと泣き叫ぶ叔母の姿を想像したが、それは心配のし過ぎから出てくる虚像であるのかと……。しかしそんな承諾と許可の可否を判断できる叔母は閉鎖された過去の中だけに存在して、今この地下鉄駅のトイレの前には存在しなかつた。

*

特別な人に関連する一連の記憶は演劇と同じであるから、記憶の中の場面は実際とは違う人為

的な舞台上で演出されることが多い。記憶の主体は感情的に過剰となつていたので、時には取るに足りないような小品一つが取り返しつかない悲劇を呼ぶこともある。叔母の記憶のうち徐君の占めている場所に日本語で書かれた原稿の束があり、それがその問題の小品なのかも知れない。幕が下りるまで舞台の真ん中でスポットライトを浴び、そして徐君に向かう叔母の悔恨と情念のすべてが収斂される、たった一つの、もの……。

その遅い春の日以降、徐君は清溪川の散策を終えると、テヨン音盤社に立ち寄つて音楽を聞き、レコードを見物した。徐君がテヨン音盤社に行くといつも叔母がいたということはなかった。しかし二人はしょっちゅう向かい合つて話を交わすようになり、少しではあるがお互いを知り合うことが出来た。店の外で待ち合わせて清溪川を歩いてから、黄鶴洞の屋台に向かい合つて座り、一緒にうどんを食べた日曜日の午後もあった。たった一度のデートだった。

徐君のエッセイでは、その頃に自分の足を清溪川に導いたのは風景だったと書かれていた。洗濯ヒモにかかつているある家族のみすぼらしい服、羞恥心など知らないかのように露店に適当に並べられたポルノ雑誌、薬屋の見え透いたウソを注意深く聞いている通行人、成人男子の頭より何倍も大きな荷物を驚くべき力で頭に載せて歩く女性たち、女子工員たちの血の気がなく真っ青な唇、胸に法律書とガソリンを隠している若い労働者の灰色の瞳……大きなジュークボックスのように絶え間なくアメリカのポップソングが流れるテヨン音盤社は、若者の死体が発見された日を記録したページの他には登場しなかった。そこだけであつた。徐君が証言しなかった風景は貧

乏と疲労の清溪川であったとしたのは、故国を離れてから韓国政府を批判する紀行文を日本のマスコミに持続的に発表するのを、後日の投獄とは関係なく清溪川に散策した時には既に決心していたことだと彼は書いたから……。

トイレから出てきた叔母はまた車椅子に乗り、申し訳なさそうな顔でちらつと私の方を振り向いた。恥ずかしがっているようだったが、今なお自分の体から臭いが出ているのかどうか知りたがっているようであった。私は叔母が好きな忘れ物センターの話 시작했다。忘れ物センターで働くということは時間を我慢するという意味であること、人々が規則的に遺失物を失くしてしまうことはないので一件の受け付けもなく過ぎる日もあること、だから時々棚に置かれた遺失物を取り出してきて細かく調べたりすること、面白いということ。私は叔母の車椅子を押しながら、わざと軽快な声でしゃべった。

実際に遺失物にはそれぞれ痕跡があり、その痕跡は物語に入って行く通路のように私を誘惑することが多い。ダイアリーやデジタルカメラは比較的細かく密にその物語が記録されている場合であり、錆びた指輪とか踵がすり減った靴の片方、クリーニング屋のラベルが付いたままのビニール袋入りのワイシャツのようなものは、ある程度の想像力を動員すれば完成できる物語を有している。厳密に言えば、その物語はその遺失物を使用していた人の手垢で作られた話に過ぎないが、持ち主を失った遺失物は棚の特定場所で過去の王国を一人で守っていくのだ。時たま遺失物から光を発することがある。一年六ヶ月という保管期間を過ぎても探しに来る人がおらず、処理

される直前に忽然と現れたかと思うと一瞬にして消える光だった。その度に私は、元の持ち主に
戻ることができず忘却の中に沈黙せねばならない遺失物がこの世に送る最後の遭難信号を見たよ
うな思いに陥るのだった。一種の喪失感だった。

そこまでしゃべった時、叔母の首が軽く曲がるのが分かった。寝入ったようだ。教保ビルデ
ィングの地下駐車場に着いて、寝入った叔母を抱いて助手席に座らせたところ、背中と腰から汗が
流れ落ちた。叔母は夢うつつに唇をもぐもぐさせて肩を内にすくめていたが、その姿は私の目に
はむずかっている子供のように見えた。ところでその時、叔母の変わっていく姿が私に苦痛だっ
たのか、自らに問いかけた。最近の一・二年の間に療養所を訪ねる回数が急減した本当の理由は、
叔母に対する憐憫ではなく恐怖を最後まで隠し通せないと思っただからだ。叔母の現在に自分の未
来を投影することが辛かったし、私もやはりいつかは老人の顔になって消滅するというジエツト
コースターに搭乗することになるだろうという予感が怖かったのだ。車椅子を畳んでトランクに
入れた後、運転席に座ってエンジンをかけた。叔母に今私たちは徐君に会いに行くのだときちん
と説明したかったのだが、叔母は簡単に目を覚ますようではなく、私は自分が正しい選択をした
のかどうか、ずっと確信が持てないままであった。

*

あの日本語原稿の束は、その年の冬休みが始まる直前に徐君がテヨン音盤社に来て叔母に直接渡したものだ。冬休みが終わる頃に帰国して返してもらいに来るから、その時まで人の目につかない所に保管してくれと徐君は頼んだ。叔母は頼まれた通りにその原稿を受け取りはしたが、なぜ自分にこんな頼みをするのかという質問は最後まで胸にしまい込んだ。徐君から信頼されているということが純粹にうれしかった叔母は、徐君からソウルに知り合いがいなかったからとか、飛行機に乗って行き来する時に面倒だからという平凡な理由を聞くことになるかと思つて怖かつたのだ。叔母は知らなかつたのだが、事実その頃の徐君には不吉なことが一つあつた。彼を訪ねて来た故郷の友人が何日間か彼の下宿で寝起きしたのだが、後になつてその友人が日本の朝鮮総連と関係があるということが分かつたのだ。その友人の手配書が回つた。朝鮮総連が法定最高刑を受けるスパイと同一に位置付けられた時代である。徐君は友人が泊まつた自分の下宿がいつかは警察の捜索を受けるかも知れないと判断したので、問題になりそうな書籍はすべて捨てるか焼いた。その原稿は処分しなくなつたので、叔母に預けたのだつた。徐君が何故選りに選つてレコード店の娘に原稿を預けたのか、その理由は原稿の内容とともに今は誰も分からない領域にある。彼はその話をエッセイに書かなかつたし、叔母は日本語を全く分からないのでその原稿を読んでもようともしなかつた。

その冬、叔母はある大学の合格通知をもらったが、他の合格者のように心はずませることが出来なかつた。映画館や洋装店を見に行こうという友人たちの誘いをすべて断り、叔母はほとん

ど毎日テヨン音盤社に出て、祖父の代わりに店番をした。叔母にとっては嫌になるぐらいに長かった冬が終わって三月になったが、徐君は現れなかった。徐君に連絡する方法はなかった。叔母は彼の日本の住所や下宿の電話番号を知らなかった。徐君に会うことの出来る空間はただテヨン音盤社だけであったが、今大学生になったばかりの叔母にもやるべきことが沢山あった。テヨン音盤社が閉店の日があると、徐君がその日に原稿を受け取りに来て無駄足になって帰ったのではないか、ひよつとしてその原稿がなくて学業に支障が生じているのではないかと心配になって、何も手に付かなかった。叔母は徐君の原稿を封筒に入れてK大学を訪ねて行ったのは三月末だった。その日K大学近くではデモがあった。デモ隊に押され、立ち込める煙の中を何も考えずに走り回って、やっとK大学の法学科事務室に着いた時には髪の毛がもつれ、生まれて初めて来たワンプースからは催涙液の臭いがした。その時事務室から出てきた徐君と同年輩ぐらいの男が、そんな叔母を注意深く見ていた。「助手だと思つたわ」と叔母は言った。「当然じゃないの。学科の事務室から出てきた二十代の若い男を、だったら何と思うの」抗弁するように荒い声で言つて、顔を赤くした。療養所の休憩室の何人かの老人たちが、そんな叔母をちらりと見た。今になってあの青年の正体を確認する道はないが、ともかく彼は徐君を知つていて、徐君に渡すものがあるという叔母に好意的だった。「よければ自分が渡してあげよう」と言う青年に、叔母は疑いもせず書類の封筒を手渡した。叔母はあのような目茶苦茶な状態キャンパスで徐君と会いたくなかったのだった。

そしてそれから半月ほど後、誰も予想しなかったことが起きた。全てのマスコミを通して大々的に報道された日本留学生たちのスパイ組織に徐君の名前が含まれていたのである。叔母は、あの原稿を当時の政府の視線で見たら不穏な内容であり、法学科事務室で出会った青年は機関員だと確信した。衝撃と恐怖の日々が続いた。徐君から預かった原稿を機関員に渡した行為は、思い切り化粧してK大学を訪ねて行った無邪気な勇氣と合わさって、許されざる罪の塊となった。叔母は自分の人生から二十歳の春と夏を取り去った。

ところで、叔母の言葉に到底理解できないこと、いや叔母が語ろうとしていないところが一つある。徐君のエッセイには、すでにその二ヶ月前に下宿の近所で私服姿の男たちに拉致されたと出ていた。その時に徐君が引つ張られて行った所は高い塀に囲まれた木造二階の家で、そこで徐君はスパイということになった。叔母の推測のようにあの原稿が不穏な内容で政府の機関員に流出して証拠となったことはあり得るが、それはあらゆる可能性のうちの一つでしかないことで、真実とは言えないのだ。さらにこのシナリオは徐君の原稿と関係なく、ずっと前から完璧に整えられていたということだ。ひよつとしたら、叔母は自分が過ちを犯したと信じたかと思っただけかも知れなかった。悪役でもないから彼の人生に介入したかった叔母の心を、しかし私は自虐的な欲望だったと敢えて断定したくない。叔母は十分に辛い思いをしたのだ。叔母にも何人かの恋人がいて、その中には結婚の話が行き来した人もいたのだが、その人とデートする日でも、叔母の一日はテヨン音盤社のガラス扉を間に置いて徐君と目を合わせた一九七一年の遅い春の晩から

始まっていたのだ。愛でないものは、時々領域の外から愛の領土の一部を掘り起こすことがある。徐君という名前の領土の真ん中には想像の法廷があつて、叔母は捜査官と被告人、証人の役割を全て引き受けて生涯を生きてきた。拷問され、罪を問われるとすぐさま自白しながら、昨日の供述を今日また否定することを繰り返す……。人間の一生が根を下ろすには非常に瘦せた領土であつたが、そこを離れないのは叔母の選択だつた。叔母と徐君を一度だけ、たつた一度だけ再会させてやることを決心したのは、叔母が今生きていることが私には最後の遭難信号と思えたためかも知れない。沈没はすでに始まり、舞台はすぐに幕を下ろすところであつた。

*

江北に位置する大病院の地下駐車場に下りて行く時に、スピード防止板を減速せずに通ら過ぎてせいで車が一度バウンドした。驚いて目を覚ました叔母がゆつくりと上体を正して、ジャケットの袖で車の窓を拭いた。車を止めた後、室内灯を点けて叔母を見た。時間と空間の座標を失つた瞳は空虚に見えたが、私は叔母が何かを予感したように緊張していると感じた。準備できたかと尋ねる代わりに、一つずつ間違つて留めたジャケットのボタンをすべて外して、また改めて留めてやった。ボタンを一つ一つ留めていく間、叔母の細い肩が何度も震えた。

徐君について調べることは、実はそれほど難しくなかつた。彼はかなり多くの文章を残してお

り、彼を取材した国内の新聞記者も何件か検索できた。二十代の中頃、後半にソウル拘留所と大田刑務所を回り、二年六ヶ月の刑期を終えた徐君は、日本に戻っても勉強を続けた末に京都の私立大学教授になった。その間に結婚をして娘が生まれ、妻とは死別した。彼のエッセイの序文には、亡くなった妻への哀悼の一文が書かれていた。愛と尊敬という単語が入っているその文章を読んだ時、私の心は説明出来ないくらいに寂しくなった。彼がまた韓国に来たのは一昨年だった。ソウルで暮らしていた一人娘と韓国人の婿が、病の彼を連れて来たのだ。彼は筋肉が徐々に麻痺する病気を病んでいた。

二ヶ月前から私は隔週に一回ずつこの大病院を訪ねて、彼の病室の近くをうろついていた。実際に私が接近できる人は、五十代と見られる朝鮮族の付添人だけだったのだが、彼女が尿器を持ってトイレに歩いて行く時、他の患者の家族であるかのように振る舞って声をかけると、自然と対話が成立した。付添人によると、徐君は喉の下がほとんど麻痺した状態で、昨年の冬から悪化して気管を切開し、人工呼吸器を挿入した容体だった。娘の家で療養していたのが、病院に長期入院するようになったのもその頃からであった。医師が通り過ぎる際に言った話として、拷問で精神的外傷が長い間潜伏していたが、段々と致命的な病気に発展したものだという非公式的な診断も付添人から聞いたのだった。体は麻痺しながらも意識が正常なために苦痛はさらに大きいという話を聞いた日には、明け方まで悪夢にうなされた。

徐君は普通夕食を食べてから病室から外出した。その時は付添人や娘が押す車椅子に体を乗せ

て病院のロビーを歩き来するのが精々であったが、それでも徐君にとつては唯一の外出だった。徐君の車椅子はロビーを三・四回回つてから大型テレビ前に静かに止まった。受け付けも終わり、メイン照明も消え、静かで暗くなったロビーで徐君は無表情にテレビを視聴した。付添人や娘は夜が深まるまで徐君を病室に連れて帰らずロビーに置いておくことがよくあつた。私は新聞を読む振りをして徐君の横に座る日々が多くなつた。「チャン・テヨンさんを覚えていますか？一度会つてみますか？」幾度となく尋ねてみたかつたが、いつも言い出せなかつた。とてもじゃないが、そうすることが出来なかつた。

—叔母さん、徐君がこの上にいますよ。

最後のボタンを留めてからそのように言つてあげると、叔母は私の言うことを聞き分けたよう
で「徐君、徐君」とつぶやいた。車から降りる時に見ると、叔母はショッピングバッグを胸に抱
いたままだつた。考えてみると、叔母はそのショッピングバッグを一日中体から離そうとしな
かつた。車椅子は取り出さなかつた。その代わり叔母の肩を脇から支えながら病院のロビーに繋
がるエレベーターに乗つた。エレベーターが止まつてロビーに出るや、いつもの夕方のように大型
テレビの前にいる徐君が見えた。

徐君の車椅子の横にあるプラスチック椅子がちやうど空いていた。そつちに近寄つて注意深く
叔母を座らせると、叔母はそつと徐君を見ると思つたら、ずつと黙つて私の方を見上げていた。
叔母の表情は、もうお前はあつちに行けという要求とも読めたし、私を置いて行かないでくれと

いう哀願とも読めた。今度も判断は私の方だった。私はゆっくり叔母の手を離すと、叔母は声もなく唇だけで「徐君？」と尋ねた。徐君はそうだという意味でうなずいていたように見えた後、私はそのまま背を向けた。隠れる空間を探したところ、弱い光がちらちら光っている飲料水の自販機が目に入った。叔母と徐君の目がこちらに向かわないように、自販機の側面に体をくっ付けた。しばらく宙ばかりを見つめていたが、二人の方に顔を向けた瞬間、緊張感で固くなっていた私の二本の足から力が抜けた。

そこでは私の予想とは全く違う場面が展開された。徐君と叔母は並んで座り、じっとテレビばかりを見上げるだけで、何も言わなかった。二人は、汽車で偶然に同乗することになり、だから話を交わす必要もなく、互いの顔を見入るわけでもない一時的な同乗者のように見えた。この瞬間、私は忘れ物センターの棚の遺失物を思い浮かべた。ひよっとしたら二人は本当にこの世から紛失した存在なのかも知れない。同意なく二人をこの世界に押し込んで、二人の享有する記憶と動く自由を奪っていった後、結局はこの薄暗い病院のロビーに放置した、あの最初の紛失者である青年を許すことが出来ない。あいつの残忍に近い無神経を、最後まで責任を取らなかった怠惰を、遅くなっても二人に昔の話を戻してやらない強情さまで、その全てのことを……。

その時だった。テレビから視線を離して一カ所をじっと見ていた叔母が、いきなり椅子から立ち上がってそっちの方に向かってすたすたと歩き始めた。直ぐに叔母について行った私は、歩みの速度をちよつとずつ落とすしかなかった。叔母はATMでお金を下ろしていた若い男の後ろに

びたつとくっついて立ち、彼が振り返った瞬間、その時まで胸に抱え持っていたショッピングバッグをそつと渡した。「私……」男がうっかりそのショッピングバッグを受け取るや、叔母が力を込めて話した。

—私、ごめんなさい。

……。

—ごめんなさい。すみませんでした。みんな……。

……。

—みんな、全て忘れて下さい。

……。

ここまで言つて、叔母は男に向つて腰を九〇度に曲げた。つらいのは徐君に会う最後のチャンス逃してしまつた叔母の誤認ではなく、叔母が徐君と間違えた男に伝えたあの言葉であつた。愛する人とは永遠の他者であるしかなかった叔母の長い忍耐の時間は、「ごめんなさい」という言葉と「忘れてくれ」というお願いで終わつた。たつたそれだけであつた。

戸惑つた顔で「誰？」と尋ねる男に向つて、叔母はもう一度丁寧に目礼をしてゆっくりと後ろを向いた。ショッピングバッグが今生の唯一の荷物だったかのように、のろい歩みでロビーを横切る叔母は軽快に見えた。いや、そうでなければならなかつた、きっと。私は男に近寄つて状況を説明してショッピングバッグを返してもらつた後、ちよつと離れた所に立つて叔母を見守つた。

叔母はいつの間にか病院のガラス製の正面玄関の前に立っていた。雨が降っているのか、ガラスに透明な光が水に濡れたように滲んでいた。その真つ暗なガラス扉を見ながら、叔母はしばらく立っていた。

五年前にアルツハイマーの診断を受けた日にも、叔母はそんな姿勢で病院の出入り口に立っていたのだ。人間というものは、回るのを止めない限り少しずつ糸が解けるしかない糸巻のようなものではないか、その時叔母はそんな思いに浸っていたと言った。病院の扉を開けて出てみると、糸巻は以前より早い速度で回っていくようで、糸巻から解けた糸は踏まれ、擦り切れ、傷ついて、ほこりとなっていくのだ。親密だった人、大切にしていた物、馴染んだ臭いを失っていくのである、世の中も同じ速度で叔母を忘れていくからだった。ある日には、鏡の中に年取った病気の女を見て理由も分からずにままぼろぼろ涙を流すこともあるだろう。一つの実存はそのように小さくなり、また小さくなっていきながら誰にも知られずに絶縁の準備をするのだ。誰の見送りもなく、暖かい別れの口づけや弔辞もなく……午後が夕方になり、夕方が夜になるまで、叔母はその扉を開けることが実際には出来なかった。

*

叔母を療養所に連れて帰ってから忘れ物センターに戻った私は、明かりも点けなくて机に座り、

叔母のショッピングバッグの中に入っていたものを一つ一つ取り出していった。男性用の靴下や石鹸セット、ハンカチや毛布だった。昔、叔母が大田刑務所に行つて準備した差し入れ品もこの構成だったのだ。徐君がソウルの拘留所から大田刑務所に移送されて何ヶ月か後に、叔母は朝起きて寢床を片付けてからソウル駅に行った。その何ヶ月間は、叔母は徐君に自分の過ちを告白せねばならないという強迫症と、彼が自分を許さないだろうという不安感の間を幽霊のように行き来していたのだ。国家保安法に違反した収監者は直系家族の他は面会が出来ないことを知りながらも、当たれば方法はあると漠然と期待して、叔母は大田行き汽車に乗った。九月のある日のことだったが、刑務所付近は冬のように寒かった。

驚くべきことに、叔母のその方策なきチャレンジはほとんど成功するところだった。叔母が刑務所の前で面会の申し込みを受け取ってくれと刑務官に頼んでいる時、徐君が投獄されてから韓国にやつて来て滞在していた徐君の母親が、ちょうど叔母の横を通りかかったのである。故国というが親戚一人いない韓国で、心細い思いで獄中の息子の世話をしていた徐君の母親は、その息子に会いに大田まで来たソウルのお嬢さんがただ嬉しかった。しかしその嬉しさが済まないという心が変わるのには、それ程時間がかからなかった。徐君には長く付き合ってきた婚約者いた。彼女は徐君と同じ在日僑胞で、徐君に代わつて結婚費用を稼ぐために看護師として働いていた病院の退勤後も、大阪市内の救急室を回つてパートタイムで仕事していた。世にも珍しい誠実で心の広い人だった。そういう話をした徐君の母親は、お嬢さんを自分の末娘だと言えば一緒に接見

室に入ることが出来るのだが、本当にそこまでしたいかと、用心深い声で尋ねた。叔母はその思慮深い質問から固い防御線を感じた。家族はその防御線のことだった。

その日の晩、叔母は差し入れ品をまた胸に抱いて、ソウル行きの汽車に乗った。疲れてお腹が空いたが、叔母は腰を真っ直ぐのぼした姿勢で正面だけをじっと見つめていた。誰も意図しない悲しみであるなら、その感情は間違いだらけだったと叔母は思った。姿勢が乱れると、あの欺瞞的な悲しみに犯されてしまうところだ。叔母は自分との感情ゲームに負けたくなかった。しかしその消耗的なゲームが汽車から降りてからもしつこく続くとは、叔母も予感できなかった。叔母が愛したのは徐君ではなく、徐君のイメージだったのであり、その実体のないイメージは叩きめしてリングの外に放り投げることが出来ないのだから。徐君の青春時代を目茶苦茶にしたという罪責感、徐君の代わりにリングから下りて行こうとする叔母の首筋を掴まえて、想像上の法廷に何度も引つ張り出した。徐君に向って広がった叔母の領地はそのようにして維持された。国境も旅券もない土地、移民と亡命が封鎖された独裁の国、美しくもなく暖かい時もなかった不毛の流刑地……。

私は携帯電話の照明に頼ってショッピングバッグを空の箱に入れて密封した後、作成しておいた遺失物の手続き書類とともに空いている棚に置いた。四二二七、新しい遺失物の一連番号だ。それはじつと待ってきたことを時間に換算できない、箱の中の、もの、に対し宣告された刑罰の日数とも言えた。

カバンに荷物をまとめて電気を消し、忘れ物センターをちよūdと出ようとする時に電話のベルが鳴った。私は受話器を取る気持ちが起こらず、暗闇の中で二つの目をぱちつと開けた。長い間忘れていたので停止画面になっていた子供時代のある一日がいきなり目の前に広がり、生々しく動き始めたのである。今修理されたばかりの映写機が背中の後ろに隠れてでもいたかのように、その日のすべての出来事が手に取るように鮮明であった。

冬休みだった。母について叔母のマンションに遊びに行つた日、私は居間のベッドに寝転がって本を読んでいる時に一本の電話を取つた。韓国語が下手なのか、一音節一音節に力を込めてしゃべる男の声に、訝しく思つた記憶である。「チャン・テヨンさんの息子さんか？」という問いに「違う」と答えようとする時に、叔母がちよūdと居間のドアを開けて入つて来た。私は叔母に受話器を渡してから、また本を読んだ。ページをめくっている時に、奇妙な雰囲気を感じて叔母の方に頭を向けた瞬間、両手で受話器を手に包むように持つたまま何べんも頭を下げる叔母の姿が見えた。「あの時徐君は何て言つたのですか？」五年前、療養所の休憩室で私がそのように問うと、叔母は照れくさそうにちよūdと笑つて言つた。「学位を取り、娘ができて、教授任用などで忙しく暮らしていたのだけれど、そうこうするうちにふとお母さんの言つたことが思い出したんだつて。お母さんが生前に私のことを話したことがあつたようなの。」

—大使館まで依頼までして叔母の電話番号を探し出した人が、たつたそんなことだけを言つたつていうこと？

—知っていたって。

—うん？

—その人は、いつか一度は私に連絡しようといつも思っていたって。

—……。

—そんな日が来れば、子供と夫の自慢、職場の上司の悪口、休暇の計画で一騒動、そんな日常的な話を聞きたいと言ってたわ。

—だから何と答えたの？

—何も……。

—……。

—何も言えなかったの。ただ聞いてばかりしていたのよ。徐君が別れの挨拶をしても、口をぐつとつぐんでいたのよ。

—……。

—それから電話は切れて、そのようにして終わったのよ。

—……。

叔母が何も言わなかったというのは事実だ。私はその時たかだか八歳だったが、言葉一つ出すことなく頭を下げるだけの通話が奇妙だということぐらいは分かった。受話器からは直ぐに男の声が消え、信号音だけが流れているのが私にも聞こえたが、叔母はなかなか受話器を下ろさなか

った。

私の記憶はそこで終わった。

しかし映写機は回り続け、私がいまだ見たことのない叔母の顔を映し出した。今になってやっと確認できるようになったその顔をじつと見ているのだが、今ごろ寝ている叔母の夢の中に押し寄せて来る朦朧とした気配があつという間にこの忘れ物センターを取り巻いた。どこからか軋む音が出て、棚はふにやつと歪みながら一つ二つと壊れ始めた。叔母はどういう訳かショッピングバッグを放り出したまま大田を出発し、四五年ぶりにソウル駅に到着した汽車から降りる夢を見ているようだ。叔母が捨てたショッピングバッグがここにある限り、忘れ物センターは世界のどこにも代替できない固有の空間として残るということを、私は知ることが出来た。同時にセンターがこの世界を組み立てには無くても構わない、或いははかない部分にしか過ぎないことも明確に分かったという事実が、私には悲しかった。